

なおして長持ち

図書館での仕事のひとつに本の修理があります。壊れたり傷んでしまった本を直していると、ものを大事に長く使うためにはどうしたらいいのか考えるようになりました。そこで今回は「なおして長持ち」をテーマにおすすめしたい本を紹介します。

1冊目は、ミスミノリコ/著『繕う暮らし』です。

こちらはお気に入りの服に取れないシミがついてしまった時や、靴下に小さな穴があいてしまった時におすすめの一冊。刺繍糸などを使って衣類を手縫いで繕う、ダーニングについて書かれた本です。修復というと目立たないように直すイメージもありますが、本書ではあえて生地とは違う色の糸を使うなど、直したところが新たなチャームポイントとなっています。お直しをすることで愛着がうまれること間違いなしです。

2冊目は、岩井希久子/著『モネ、ゴッホ、ピカソも治療した絵のお医者さん』です。

この本は様々な絵を蘇らせてきた名医が絵画修復の現場を語ったもの。世界一絵にやさしい修復を目指す著者は、直島の地中美術館に収蔵されることになったモネの『睡蓮』シリーズの設営に携わることとなります。どんな名画でも長い年月が経つとかならず病気になるからこそ『治すよりも、まず「予防」が肝心』だと、ガラスケースに密閉して絵画への負担を少なくするという画期的な展示方法を提案しています。試行錯誤を繰り返しながら根気強く絵画に向き合う、プロの技術と理念に触れることができる一冊です。

3冊目は、いせひでこ/作『ルリユールおじさん』です。

ソフィーは大事にしている植物図鑑が壊れてしまったことをきっかけに、ルリユールおじさんを訪ねます。ルリユールおじさんは、いまでは数少ない伝統的な手製本の職人。植物図鑑はバラバラになってしまった頁が綴じなおされ、装いも新たによみがえります。ルリユールには「もう一度つなげる」という意味があります。ルリユールおじさんの手が、ソフィーのかけがえのないその一冊への想いをくみ取り、あたらしいのちを吹き込まれた本は未来へとつながっていきます。作者が何度も製本工房に通いスケッチしたという美しい手仕事と、ふたりの交流の物語に心が温まる絵本です。

図書館には他にも修理やメンテナンスのヒントになる本があります。大事にしていたものが壊れてしまったら、あきらめて捨ててしまう前にいちど図書館にきてみてはいかがですか。